

人間の行動やことばから、どのように「老い」を判断するか？

How to Recognize “Aging” based on Human Behavior and Conversation?

林 侑輝^{*1}
Yuki Hayashi

阿部 明典^{*2}
Akinori Abe

^{*1,2} 千葉大学 人文社会科学研究科 総合文化研究専攻, ^{*2} ドワンゴ人工知能研究所
^{*1,2} Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University, ^{*2} DWANGO Artificial Intelligence Laboratory

Summary: For healthy aging, it is important to check psychological information such as cognitive function or mental state. We considered that some conventional test or interview were insufficient to check human psychology. Accordingly, we conducted the following experiment with an aged woman. In our experiment, interviewer(first author) questioned a few things to interviewee(the aged woman) and interviewee was able to tell her opinion or experience freely. In this paper, we analyzed her way of talking and thinking.

1. はじめに

第一著者の祖母(A, 70代女性)は、近頃腰痛を患っている。痛みが激しくなってきたからは、夫のサポートなしには歩行したり入浴したりすることさえ困難になってきている。当然、家事をしたり買い物に出かけたりすることも不可能となり、一日の大半をテレビの前に座って過ごしている。著者は、病気の進行具合や改善の見込みなどに加えて、内的な認知機能の低下について懸念している。認知症に限らず、物忘れが増えたり鬱病を併発したりすることも望ましくない。

健康で長生きするためには、血液や脳について医学的な診断をするだけでなく、認知機能や心理など内的な情報も知ることが重要である。そこで、著者は A に対して簡単なインタビューを行った。記憶力のテストや鬱病のチェックをすることは、A 本人の気分を害する恐れがあるからである。また、自然な会話の中には、テスト項目の中には収まりきれないような情報も含まれているのではないかと考えたからである。本論文では、インタビューの語り方の特徴について分析する。更に、インタビュアーはどのように質問したり誘導したりするのがふさわしいかについても検討する。

2. インタビュー内容とその分析

第一著者(B, 20代男性)は、祖母(A, 70代女性)に5分ほどのインタビューをした。AとBの間で交わされた会話を書き起こし、その分析を行った。Bの目的は、家に閉じこもりがちになったことによる様々な問題を明らかにすることであった。

尚、以下の記述において、言い間違いや言い淀みについてはある程度省略している。本論文では、どのような内容の会話が交わされたかを分析することに主眼を置いているからである。また、話者交代に関してであるが、Aの発話の最中にBが相槌を打ったりするような事例ももちろんある。しかし、本インタビューにおいてBの基本的な役割はAに質問をしたり、会話が途切れた場合に話題を提供したりすることであるので、そのような内容の発話に絞って記述することとした。

表記について、文の区切れ目とみなせる箇所(比較的長い間がある場合など)は「。」、延ばし音は「:」、明らかに疑問文と判定できる箇所(末尾の音が上昇系である場合など)は「?」の記号を

用いている。

まず、最初の会話部分(1)を以下に示す。

(1)

B: あんまり動けなくなったでしょ。何が一番大変?今。

A: うん。とね。今一番大変。トイレ行くの。そったやつでいいんだか?

B: うん。僕のための記録だから。

A: だか。うん。トイレが一番大変だね。

B: あとは?

A: あとは。なあ。まず。寝たり起きたりするのもだね。その次は。

B: うん。今。何が一番できるようになりたいことある?

A: 歩くこと。ちゃんと。人の。まずね。腰曲げても何でもいいけども痛くなければいいのよ。痛いから歩く。杖つくにしたって何するったって人の手借りてもちゃんと歩けないでしょ。だからやっぱりそう。歩くの。一番あれだね。

Aは、最近の生活の中で苦労していることとして、「トイレ行く」こと、「寝たり起きたりする」ことを挙げている。ただし、Bが「何が一番大変?今」、「あとは?」と質問してからそれぞれ4秒、7秒ほど思案するための間をおいて、答えを出していることに注目したい。これに対して、腰痛が治って自由に動けるようになった場合、「何が一番できるようになりたいか」を質問した場面では、「歩くこと」と即答している。更に、他の箇所と比較すると、そのように答えた理由を自発的に、長めに説明していることが分かる。特に、「まずね」と前置きしている箇所から推測しても、Bの質問に単に応答しているだけでなく、Bに対して説得的に自分の状況や考えを説明しようとするAの態度が窺える。

会話は、以下の(2)へと続く。会話(1)を踏まえて、Bは、祖父(C, 80代男性, Aにとっての夫)との関係に焦点を当てた会話を展開しようとした。

(2)

B: Cに家事をやってもらってるのはどう?助かってるだろうけどさ。自分でできるようになりたいと思う?

A: そう。やりたいよねえ。うん。

B: 具体的に何.Cにやってもらって何が気になる?

A: そう。うん。突然のあれ。うん。

B: 例えば洗濯のこととかさ。掃除のこととかさ。やっぱり自分でやらなきゃと思うことある?

連絡先: 千葉大学 人文社会科学研究科 総合文化研究専攻,
〒263-0022 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33,
yu.hayashi[at]chiba-u.jp

A: そう.ある.したって風呂に入るにしても大変だもね.風呂も大変だ.うん.一番やっぱり.トイレが一番.その次が風呂かもしれねえな.うん.風呂に入るたってやっぱりよ.ちゃんと.大騒動だもんね.うん.痛くなければいいのよ.まずこうあれしたときびびりしたりする^{注1}からよ.ほんと.風呂も.風呂も.んだな.一番はトイレ.風呂だ.うん.それから寝たり起きたりするやつだまらずな.

家事について、「自分でできるようにしたい」という B の質問に、A は「やりたい」と即答している。ところが、「C にやってもらって何が気になるか」という質問に、すぐに答えを出せずにいる点は、(1)の分析と共通している。つまり A の場合、早く腰痛を治して、自分でできることは自分でやりたいという意欲が感じられる。将来に対する希望を失っていないとも言える。ただし、このような A の応答の仕方について、別の見方をすれば、B の質問が答えやすい内容であったとも考えられる。実際、日常生活で不便に感じていることを尋ねた場合、答えを出すまでに時間を要している。不便がないから、答えるのに苦労しているとは考えづらい。この場合、自身の行動を振り返ったり記憶をたどったりする手間があるからと考えるのが妥当であろう。

しかし最終的には、A は、日常生活における苦勞を B に説明するのに成功していると言える。「んだな.一番はトイレ.風呂だ.うん.それから寝たり起きたりするやつだまらずな」という部分は、A が出した結論であり、ある程度正確な結論を出すことができたという本人の納得感も見出せる。このように、A が自身の現状を把握し、描写しようとする中で重要であったのは、「風呂に入るたってやっぱりよ.ちゃんと.大騒動だもんね」というように、具体的な実感に基づいた語り方をしている点であると考えられる。(1),(2)において B は、比較的一般的な質問の仕方をとっている。B の立場としては、より具体的な質問をしようにもその術がないので仕方ないとも言えるが、A にとって一般的な形式の間に答えるというのは簡単ではないだろう。よって、自身の行動を、ジェスチャーなども交えながら再現するような語り方が A にとっては負担が無く、やや一般的な形式としての結論を導くことに成功していると考えられる。

会話は、以下の(3)へと続く。(2)の最後の発話と、(3)の最初の発話は連続している。(2)の最初で B が発した「C に家事をやってもらってるのはどう?」という質問に、応答する形式となっている。ただし、B はこの質問を再度提示したわけではないことを断っておく。

(3)

A: うん.そしてね.うん.あの人ね.食事のことはな.うん.何て言うかな.:とにかく物持って.うん.何と言うかなあ.

B: 物運ぶとき?

A: うん.持ってきてけるたって.それを.一回今日持って来て食べさせていたらまだ.誰も.あの:どこの人だったって一杯の.ちよこつとしか作らないわけでないよ.ね.やっぱり残るだけ作るでしょ.ね.ひばそれをあたし.ま:朝食べたら.そして食べたらや.残ったやつはちゃんといいよ.こうこうちゃんとラップして持ってける.また次のときまですはいつ.も.今まではそんな

注 1: 話している最中の A のジェスチャーや、A について事前に得ていた情報に基づくと、「体勢を傾けたときに、体に痛みが走る」ことを表現していると解釈できる。

注 2: 話している最中の A のジェスチャーに基づくと、「料理の残った皿に何度もかけた外したり」することを表現していると解釈できる。

やつを早く食べる.ないとまたすぐ悪くなる.悪くつてもね.それ忘れてしまうもな.だからそれをすぐ次の日に一回食べて.そしてまた別のものをあればそれを作ってもいいんだけど.ね.また新たにみんな作るって.そしてその残ってるやつは全然忘れてしまうわけ.私それはちよつとあれだと思ふな.

B: だから前食べたのをちゃんと覚えておかないとね.これだけ作ったから次の日また食べて.で終わりにしようっていうね.

A: そうそう.うん.そう.そうでないとやっぱり.ね.もの捨てるからよ.やっぱり次の日だったってやっぱりそれは食べないとうまくないと思ふの.

B: ふん.

A: だから.前に残したやつだからそれで出さねって言うんだ.そしておめえ食べねからなんとすぐ悪くなるからよ食べれって言うたって.やっぱり次の日また出てこばそれ食べちゃうのよ.それでも出さないで別新しいものを作ってやつを食べれ食べれって言うからよ.それはちよつとあれかかって思ってる.うん.

B: 古いものは古くなっちゃうわけだもんね.

A: そうそうそう.そしてもう忘れてしまえばもう.すぐ悪くなっちゃうでしょ.やっぱりラップだったってこう^{注2}やっつればな.うん.そう.

会話(3)においては、A によって、C に対する食事の不満が述べられている。趣旨としては、C は翌日の食事のことまで考えて料理をしないから、冷蔵庫の中に古くなったおかずが残ってしまっており、それが勿体無いことだという意見を述べている。このような状況を改善してほしいという、C に対する要望を含意しているとも解釈できる。

ただし、単なる不満の表明として片づけることは適切でないかもしれない。なぜなら、食事の用意の仕方を直ちに改善してほしいというような明示的な要望は述べられておらず、また、そのような要望を C に伝える、あるいは B を経由して C に伝えることが A の目的であるとは断定しづらい。例えば、会話(3)の下線部を参照すると、「どこの人だったって一杯の.ちよこつとしか作らないわけでないよ.ね.やっぱり残るだけ作るでしょ」というように、C の行動だけを具体的に取り沙汰するのではなく、一般化した語り方をすることにより、B の同意を得やすくしている。また、「私それはちよつとあれだと思ふな」という発話について、副詞「ちよつと」や終助詞「な」を使う A の語り癖から判断しても、なるべく客観的で正当性のある主張をしようという態度が窺える。

「おめえ食べねからなんとすぐ悪くなるからよ食べれって言」われた場合についても同様である。C からそのように言われたことに対する拒否や反論の表現は、少なくともインタビューの場においてはみられない。むしろ、そのような物言いをする C を批判する表現ではなく、A 自身の行動や感情を述べることによって、食事の不満を描こうとしている。要するに、A は現在の生活に関する不満を B になるべく正確に伝えることが目的であり、また、それによって共感や同意を得ることを目的とする語り方をしていると考えられる。具体的に何らかの解決を望んでいるかどうかはやや不明瞭であり、つまり、インタビューとしては回答を引き出すことを主眼とするようなインタビューの進め方は必ずしも適切とは言えない。この点については、次章でも述べる。

会話は、以下の(4)へと続く。

(4)

B: で食べることにに関してだけどさあ.買い物にさ.あそこかにかさ行かなくなったわけでしょ.それはどう?今のところは.

A: まずな.うん.それはあれだけど.

B: やっぱり自分でやらないっていつのがあるか?

A: なんも、まずそれはそこまで言わね。うん、まず作ってきてくれたやつはそれを食べさせてくれたときそのやつをね。次の日またちよつとこうあれしたら出してけて。そういう風にすればなんもあだし言わない。

B: 自分でさ、ひとり外に出るために今まではさ、買い物に行くときと孫の家に行くときと、基本的にはそういうことか、毎日出るって言ったらね、この毎日出られないっていうのは、どう?

A: うん、出られないのはほんとに悔しい。うん、でもね、あんまり欲張りなこと、あちこち悪くて何とかならないのを、欲張ってあれしてこれってそれはまずあだしも、あの、目をつむってるはもう。うん、したからまずあと陰で一生懸命自分も早くそこさ出ていかれるように、努力はしたいなと思ってるけどもなかなかそれが進まないからね。うん。

B: 家の中にいて退屈だと思ことは無い?

A: うん。

B: まあどうしてもこう座ってる時間があるって、まあテレビとあって、まあ外の景色が見えるけどさ、退屈だと思ことは無い?

A: 退屈か。うん、ああ、あだしあんまりだからよ、そ、退屈だと思、のものいいんだけどあんまり外のところ見たくなくなったの、最近、悔しくて、まずいじること³できないでしょ。うんだからよあんまり外見たくないような気がする。

B: 例えばそこ花壇見たら花壇やりたくなるとかね。

A: そうそうそう、だからね、あんまりあれすればそこまで、欲張らないでまず中の方にいて、うん、やろう、あれしてるかなと思ってる。

B: そうなんだね。

A: そう。

会話(1)や(2)の事例でも見た通り、「家の中にいて退屈だと思ことは無い?」というような想起させるタイプの質問は、返答するのにやや困難を伴うことが確認できる。もちろん、疑問文の形式から言えば、「ある」か「ない」かで答えることも可能であるが、Aの場合は、具体的な事例を持ち出すことによって答えようとしていることが明らかである。ゆえに、「ある」か「ない」かの返答は省略したまま、具体例があるかどうかにかんがって考えを巡らせてしまっていると解釈できる。このように、記憶を辿らせているという点で、「返答するのにやや困難を伴う」タイプの質問であると本論文ではみなす。

しかしそのような質問の直後、「あんまり外のところ見たくなくなったの、最近、悔しくて」という A の発言がみられる。B は、「座ってる時間」が増えたものの「まあテレビとあって、まあ外の景色が見える」ことがせめてもの慰めになっているだろうという前提のもとで、「退屈だと思ことは無い」かと尋ねている。結果的に、「退屈だと思ことは無い」の答えは述べられていないし、退屈に思っていることを語りたいという意味もみられない。それよりも、「あんまり外見たくないような気がする」がゆえに外を見たくなくなったという、インタビュアーの想定に反する情報が得られた。そのような点で、この情報は、本インタビューにおける一番の収穫と考える。

尚、下線部で示したように、A の語りには「それはあれだけど」、

注 3: 話している最中の A のジェスチャーや、A について事前に得ていた情報に基づくと、「花壇の手入れなどをすること」を表現していると解釈できる。

注 4: A はテレビを指しながら話しているので、「画面に表示された相撲取りの名前」を表現していると解釈できる。インタビュー中、テレビは付いたままであったが、相撲中継が放送されていたわけではない。

「ちよつとこうあれしたら」、「あんまりあれすれば」のように、代名詞「あれ」が頻繁に使われているという印象を受ける。これは、(1),(2),(3)についても同様である。ただ、話の内容に関して整合性のとれないような箇所はここまで特に無かったので、本論文においては問題視しない。しかし、「まず作ってきてくれたやつはそれを食べさせてくれたときそのやつをね。次の日またちよつとこうあれしたら出してけて」というように、話の内容はほぼ伝わるものの、論理的に展開しているとは言えない点は、見逃せない。話し言葉とは言えども、例えば、「まず作ってきてくれたやつは、それを食べて、残ったやつをね。次の日また出してけて」というくらいの説明の仕方はできないものかと考える。この点について、言語的なテストを実施してみたいというのが分析者としての正直な思いではあるのだが、それは本論文の趣旨に沿うものではないので、別の機会に譲る。

会話は、最後の部分(5)へと続く。

(5)

B: あれ、なんかあの、何て言うのかな、ことばがこう、つかえる様になったとかさ、もの思い出しづらくなったとかさ、そういうのは無い?

A: いや、それはある、ということは、まず、こうあれしたとき、名前よ、ぱっと出ねえで、あれ誰だっけな、と思うときあるよ。うん、そしてあれすればその後なればあつこの人このあれだったなっというけども、いざ、あれつこの人誰だっけな、名前何て言うっけなと、まずだからあの、認知とかそうかなと思ったりもするでも、どんな人にだってまず、言葉は今までだってうん、ぱっと出ねえで後、出てくるからまずいっかなと思ってるんだどもな、まず。

B: なんか名前のこと以外で、なんか、なんかちよつと気がかりなこと無い?なんか、なんかちよつとあれがこう、できなくなったとかさ。

A: まずそこ、それは、ねえんだ気もするな、突然のあれだけでもよ、うん。

B: たぶん C と喋ってるの聞いててもさ、あんまりこう言葉がつかえたりっていうのあんまり無いからさ、名前思い出せないな:くらいか、なんかほら例えばさなんかやり、なんかやんなきゃいけないのを忘れてて失敗しちゃったとかさ、そういうことないよね。

A: うん、まずな、それはねえんだ気するでもな、だから相撲取りでも名前を、あつこの人誰だっけな、と思ったりするのよ、そうすればあそこ出たの⁴ ああそうそうとうん、なんとかっていうのわかってくるんだけどよ、あれ、って、うん、そんなもんだな。

B は、A の内的な認知機能に関して、その程度を知る手がかりを探そうとしている。しかし話題は、人名をど忘れしてしまうという内容に終始している。A も、「認知とかそうかなと思ったりもするでも、どんな人にだって」多かれ少なかれある経験であり、「言葉は今までだってうん、ぱっと出ねえで後、出てくる」ことがあるという趣旨の発言をしている。A に特徴的なできごとや、会話(4)のように、B の想定を上回るような会話には発展しておらず、そのような意味では会話(5)における B の誘導はやや不十分であったと言える。

3. 考察

まず、A の語り方を参考に、インタビュアーの語り方について考察する。インタビュアーにとっては、日常生活を振り返りながら、つまり記憶を想起しながら語ることはやや難しいという可能性が考えられる。特に、本インタビューにおける B のように、インタビュアーが「何が一番大変?」、「具体的に何?」といった抽象的な質

問をした場合、インタビュイーはその場で考えをまとめて語るということに困難を感じるはずである。しかし、不満や苦勞した体験というのは、比較的スムーズに語る可能性が見出された。この点においても、インタビュアーの誘導の仕方はポイントになるが、愚痴を話している中にはその高齢者に関する情報が多く含まれている可能性がある。一問一答形式のテストなどと比較すると、本人に語りを強制することなく、語りを引き出せるというメリットがある。ただし、インタビュイーには自由な発話を許しつつも、インタビュアーには発話を引き出したりスムーズな発話を助けたりするための技術が必要と考えられる。今後は、インタビュイーから引き出したい内容の発話があった場合、インタビュアーはどのような質問や合いの手を入れるべきかについても検討する予定である。

インタビュアーの技術についてであるが、上でも述べたように、テーマなどを設定しないような比較的自由な会話を実施し、インタビュイーの体験や愚痴を引き出すというのは、簡単ではない。その際、インタビュイーの記憶にばかり頼るのではなく、インタビュイーと姿勢・視界・体験などを共有しながら語りを引き出すという方法は有効ではないかと考えている。会話(4)において、外の景色を見たくなくなったという趣旨の発言を紹介した。このとき、「外の景色が見える」ことについて、インタビュイーとインタビュアーの認識には差があったものの、「外の景色」ということばがその後の発話を引き出したという点では、Bのような語りはある程度価値があると考えられる。ポイントは、インタビューの場所はインタビュイーの生活空間であり、その生活空間の様子に即した語りをしたことにある。つまり、普段のインタビュイーの視点に立ち、「こう座ってる時間があって。まあテレビとあって。まあ外の景色が見える」だろうと想像しているわけである。

相手の立場になってものを考えるというのはやや難しい部分があるが、実際に姿勢や視界を共有することであれば、想像で補うことも含め、比較的实践できそうである。この点については、[諏訪, 2015]が一人称研究について述べていることとも合致する。すなわち、「状況依存性や身体性を有する知は、(状況依存なのだから)あらかじめその成り立ちを記述したり、モデル化できるような対象ではありません」と主張した上で、『「まちを歩いていてどんなときに涼しさを感じますか?」と質問されて、『蝶がひらひらと舞って行った道端にふと一輪のすみれを発見したときです』とは答えられない』ことを例として挙げている[諏訪, 2015]。本論文で取り上げたようなインタビューの実践においても、インタビュイーにとって「身体が環境とインタラクションを起こした場から乖離した状態で、自分の身体が生成した知を思い出すことができない」[諏訪, 2015]ことを念頭に置いた質問・誘導の仕方を検討すべきと考えられる。

本論文で実施したインタビューの方法は、例えば、回想法とは異なる。回想法における語りとは、一般的には過去の懐かしい思い出であることが多い。それを誰かに話すことで脳を刺激したり、精神状態を安定させたりすることを目指す手法である。しかし、本インタビューは、語る人の生活の様子や内的な認知機能について知ることを目的とした。もちろん、本論文で実施したようなインタビューと回想法とを組み合わせたような手法を開発できる可能性もある。いずれにせよ、語ってもらいたい人になるべく負担をかけないことを考慮すべきであろう。

4. おわりに

高齢者を対象に、日常の生活の様子や自分の心身の状態、それに付随する困難などを知ることを目的としたインタビューを実施し、その分析を行った。前章で取り上げた一人称研究に関して、[阿部, 2015]は、看護師間のコミュニケーションエラーの原

因について解析したケースを例題とし、一人称研究の意義について次のように述べている。「私以外の人が解析したら、違う形の結果にしたかもしれませんし、違う所に注目するかもしれません。つまり、私は一つの可能性(解釈)を指摘しただけです」。本論文で取り上げたような、ひとりの参加者から得られた会話データの場合には、本人の姿勢や視界を共有(あるいは、真似)しながら引き出された発話・会話であり、その人の知がある程度リアルに表出していること、また、その解釈においては分析者の知もまた表出していることが重要であると考えられる。

参考文献

- [阿部, 2015] 阿部 明典: ことばを創造する知, 一人称研究のすすめ 知能研究の新しい潮流, 諏訪 正樹・堀 浩一編著, pp.85-104, 近代科学社 (2015).
- [諏訪, 2015] 諏訪 正樹: 一人称研究だからこそ見出せる知の本質, 一人称研究のすすめ 知能研究の新しい潮流, 諏訪 正樹・堀 浩一編著, pp.3-44, 近代科学社 (2015).